



石川県ユネスコ協会 北陸 ESD 推進コンソーシアム

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

SDGs・ESD 実践ガイドブックⅡ

北 陸 版

— 改訂版 —



はじめに

2021年もコロナ禍は収束せず、学びの在り方も含めた社会の在り方が大きく変わろうとしています。私たちは正解のない世界へいよいよ飛び込んでいます。それでも、私たちはこの状況に対して、迷いながらも様々な工夫を凝らし、持続可能な社会の担い手を育む取り組みである ESD 教育を実践しSDGs達成を目指しています。

丁度2020年度に小学校、2021年度に中学校、そして2022年度には高等学校の新学習指導要領が全面施行されます。その教科書では、2015年に国連で採択された世界の目標である「持続可能な開発目標 (SDGs)」やそのための人づくりを担う「持続可能な開発のための教育 (ESD)」について記載されています。しかしながら、SDGs に関する理解、SDGs と ESD の関係については、必ずしも多くの学校の先生方が熟知している状況にはありません。企業、行政や一般の市民の方々もSDGsの名は知っていても、その内容はよくわかっていません。また、コロナ禍のため学校及びESDの推進する関係者は孤立しがちになっています。

そこで、令和元年度に、新学習指導要領の全面実施を控えて学校教員、社会教育関係者を中心としたステークホルダーが参考となる『北陸版SDGs・ESD実践ガイドブック』を作成しました。

本年度は、一般市民・これからSDGs・ESD教育を実践する教員向けの、平易でより実践に即した改訂版を作成しました。そのため、Ⅰ部を実践事例編、Ⅱ部を理論編としました。皆さんがSDGsを「自分事として」捉え、子どもたちと共に持続可能な地域社会づくりに関わってほしいと願っています。

本書が北陸の、SDGsとESDを進める皆さまのお役に立つことを祈念しています。

令和4年3月

石川県ユネスコ協会 理事
今井 和愛

目 次

はじめに

目次

I 部 実践事例編

第1章 SDGs・ESD実践事例

- 1 これからの勝山市の重点政策をSDGsで考える
—地方財政の仕組みと課題— 勝山市立勝山南部中学校 …… 2
- 2 敦賀高校創生部での取り組み 福井県立敦賀高等学校 …… 4
- 3 身近なSDGs 私たちの関わり
～海の豊かさと神通川上流の関係～ 富山市立楡原中学校 …… 6
- 4 石川県珠洲市のSDGs学習 能登SDGsラボ …… 8
- 5 金沢大学附属病院内学級におけるオンライン天体観望の支援
金沢市キゴ山ふれあい研修センター …… 10
- 6 能美市の産学官協働プロジェクト 「こどもサミットSDGsを考えよう！」 in 能美
能美市(日本海開発)の協働プロジェクト …… 12

コラム：2021年度北陸ESD推進コンソーシアム成果報告会での講評 …… 14

II 部 理論編

第2章 なぜSDGs・ESDが必要なのか？

- 1 SDGsに取り組む必要性 …… 15
- 2 SDGsとESDとの関係 …… 16
- 3 地域のユネスコ活動によるESDの取組事例 …… 18

第3章 SDGsと地域社会

- 1 連携・協働の有り様 …… 20
- 2 新時代の学びとしての“学校3.0” …… 20
- 3 地域社会でのSDGsの可能性 …… 21

参考資料 …… 22

第1章 SDGs・ESD 実践事例

1 これからの勝山市の重点政策をSDGsで考える — 地方財政の仕組みと課題 —

勝山市立勝山南部中学校 教諭 伊豆蔵 和貴
(現任校 坂井市立坂井中学校)

★活動テーマ 地域との連携

1. 活動の特色

総合学習における「町づくり」は、地域の現状を踏まえ無限に発想を広げていくものであるが、本実践では社会科として、地方財政の仕組みを学んだ後、財政の視点から依存財源に依らない持続可能な「町づくり」を構想する。

市が公表している6つの政策目標のそれぞれをSDGsに当てはめて問題を焦点化し、将来の勝山市にとって最も重要な政策とは何かを考えていく。



意識するSDGsのゴール

2. 取組の詳細

市の政策目標を6つの柱で示した第5次勝山市総合計画を使い、各政策がSDGsのどれに対応するかを考えた上で、「これからの勝山市にとって最も重要な政策」を、6つのなかから最重要を1つ、次点を2つ選ぶ。地方財政の仕組みを教師が解説した後、統計資料を使って都会と地方の自主財源・依存財源比率の違いとその理由を考えさせた。その後、導入での問い「財政の視点を踏まえて」をもう一度考え、班で話し合っ一つの見解に統一した。同じ問いでも、自由に考えさせる前半と違い、後半は「財政」という枠組み（縛り）を設けることで、「地方税を確保するために企業を誘致し定住者を増やす」「教育に予算を投入して住みやすさを子育て世代にアピール」「雪が産業だから環境対策が必須」など学んだ知識を活用して議論していた。



ダイヤモンドランキング風価値判断

総合学習では生徒の自由な発想から町づくりを構想するが、どうしても現実性・実効性に乏しい。社会の仕組みや、直面する問題への知識に立脚して理詰め考えさせることは

社会科が補う部分である。より深い学びへと至るために、地域学習を総合学習と社会科の両輪で進めることを目指した。

3. 取組を通して変容が見られた点

- 地方都市が共通して抱える問題の複雑さや因果関係に気付き、勝山市がもつ強みを活かした町づくりをより現実的に考えるようになった。
- 内容をシンプルに置き換え、関係性を理解しやすくするツールとして、教師が仕向けなくても自主的にSDGsを活用するようになった。
- 社会科の知識を現実社会と結び付けて活用することができた。



班で議論し、意見を統一する

2 敦賀高校創生部での取り組み

福井県立敦賀高等学校 教諭 久保田 広行

1. 敦賀高校創生部（Club for Regional Revitalization）とは？

「創生部」の発足は令和2年9月。きっかけは、コロナウイルスに感染したことが原因で偏見を抱かれ、誹謗中傷の的となり、住んでいた場所を追われる「コロナ差別」に関するニュースを見たこと。敦賀ではニュース報道のような事態を招きたくない、敦賀を今後誰もが末永く住み続けられる街にしたい、今以上に敦賀市内外の多くの人から愛される街にしたいという想いで敦賀高校1年生21名の有志で発足。

そこで注目したのが、敦賀がポーランド孤児やユダヤ人の難民を温かく受け入れたという歴史。もともと敦賀は多くの人が行き交う日本と海外をつなぐ玄関口であったし、多様性に寛容な風土があった。その当時の敦賀市民の想いを受け継ぎ、誰もが安心して訪れることができ、誰もが安心して住むことのできる街づくりに役立てたいと考えた。折しも、令和2年はその歴史を展示する人道の港 敦賀ムゼウムリニューアルの年。今一度当時の歴史にスポットを当てるとともに、多くの人たちに当時の難民や孤児を受け入れた敦賀の人たちの想いを追体験してもらい、現代に蘇らせたいと考え、敦賀ムゼウムにご協力を仰ぎ、館内ガイドを目指すことを決めた。

令和4年3月現在、任意の研究会として発足した創生部は、敦賀高校の正式な部活動に認定され、人道の港 敦賀ムゼウムの館内ガイドをはじめ、敦賀市立博物館や地域の観光推進団体、県内企業さんとの連携を深めつつ地域活性化に資する活動に取り組んでいる。

2. これまでの取り組みと学び

ガイドを目指す過程で以下の活動に取り組んできた。

R 2.9 生徒の自主的な研究会として発足

- .11 山田基靖さん（国連日本政府代表部SDGs担当）講演会
「高校生がSDGsに取り組む意義と可能性」



我々の祖先が平和のために貢献してきて、…今この瞬間安全に暮らしていると思いますけど…これは一切当たり前ではない。…それを日々感じながら、自分たちの街、自分たちの国、自分たちの仕事も含めてどうやったら次の世代につながっていくかを考え続けることがどんな業界の人にも求められている。

- .12 西川明徳さん（人道の港 敦賀ムゼウム館長）講演会
「人道の港 敦賀について」

中谷剛さん（アウシュヴィッツミュージアム日本語公式ガイド）講演会

「ホロコースト 一あの時敦賀市民がユダヤ人を受け入れていなかったら—」

ますます国際化でどのような小さな街や村にも外国人の人たちが住むようになり、自国の文化や宗教、権利を主張するようになる…その時に認めてあげることができるかどうかが大切。

3 身近なSDGs私たちの関わり ～海の豊かさと神通川上流の関係～

富山市立楡原中学校 教諭 鈴木友之

本校は、富山県内の中学校で唯一のユネスコスクールとして認定されており、様々な学習や学校行事において、ESD教育の一環としてSDGsと関連させた取組を行っています。

今年度は1年生の総合的な学習の時間に地域を流れる神通川を中心に、海洋ゴミ問題について学習を進めました。SDGsゴール14「海の豊かさを守ろう」についての課題や対策、世界や国内で行われている取組等の学習を通して、その他のSDGsゴールと関連させながら学習を行いました。

1 SDGsを学習する意義

2015年に国連総会で採択されたSDGsは、2030年までの達成を目標としています。2030年は現在の中学1年生が20～21歳と、社会で働き始める年齢となります。世の中のSDGsに対する意識の高まりがピークを迎える頃に社会に羽ばたく生徒たちにとって、SDGsは必要不可欠な知識であり、将来の進路選択にも大きく影響する可能性があると考えられます。

昨今の世の中のSDGsに対する動きに敏感に反応し、「自分も目標達成のための重要な一人」として世界や国内で起こる問題に関心をもてるよう指導したいと考えました。

2 学習の流れ

(1) 環日本海環境協力センター（NPEC）訪問

2021年10月に校外学習で「環日本海環境協力センター（NPEC）」を訪問しました。NPECでは海洋ゴミ問題の原因とその調査方法や被害等を実際のデータをもとに説明していただきました。実際に富山湾で起こっている様々な問題の原因が、県内の陸地から流れ着くゴミであることを学び、生徒たちはより身近な問題として捉えられるきっかけとなりました。

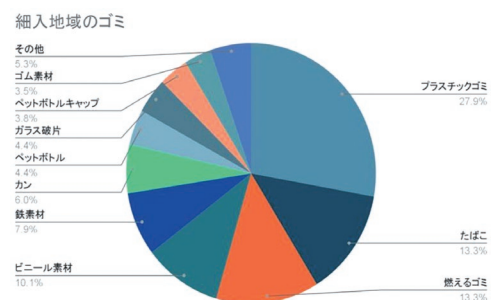
NPECでは、海洋ゴミ問題の中でも深刻な問題となっている「マイクロプラスチックゴミ」についても説明を受け、実際に採集方法を体験しました。その後の岩瀬浜での海浜清掃時に実際にマイクロプラスチックゴミを採取し、生徒たちは浜辺に無数に落ちているマイクロプラスチックゴミに驚いていました。

(2) 岩瀬浜・神通川上流・学校周辺のゴミ調査と結果

夏休みに行われた「平和の鐘をならそうin上行寺」での講話で聞いた、海洋ゴミの原因となっているゴミの約8割が陸から流れ着いていることに驚きと疑問をもち、実際に「岩瀬浜(海)」・「神通川上流(川)」・「学校周辺(陸)」のゴミの種類と量を調査しました。

① 学校周辺(陸)のゴミ拾い

学校周辺のゴミ調査は、校舎から一周約500mの通学路のゴミ拾いを行いました。拾ったゴミの種類は主にプラスチック容器、プラスチック製ビニール袋、ペットボトルやキャップ、空き缶等が



落ちており、とくに多かったゴミはたばこでした。500mの距離に約50本も落ちており、生徒たちは自分の住む地域のゴミの多さに驚いていました。

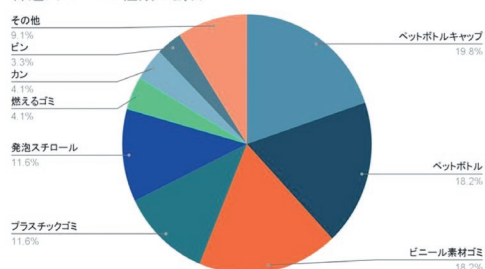
学校周辺のゴミ拾いの結果、最も多かったのはプラスチック類で、全体の約46%となりました。

② 神通川上流 (川) のゴミ拾い

本校の近くを流れる神通川上流は、教室の窓や国道41号線から眺める限り、とても美しく、ゴミ等が浮いていることはほとんどありません。この美しい神通峡は、細入地域の住人にとって誇れる景色です。

見る限りではゴミ等は浮いていませんが、ボート部が練習の合間に、川の岸辺を見てみるとたくさんゴミが引っかかっているのが見えました。川のゴミ拾いをした結果、プラスチックの破片や破れたプラスチック製ビニール袋が多くありました。特に多かったのがペットボトルでした。

神通川のゴミの種類割合



③ 岩瀬浜 (海) のゴミ拾い

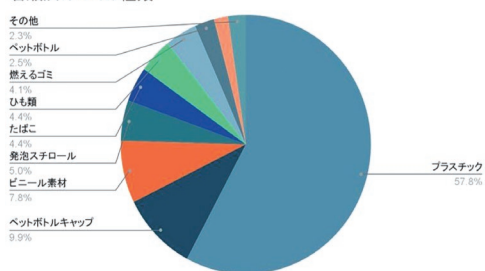
校外学習で行った岩瀬浜の海浜清掃では、30分間で約440個近くゴミを回収しました。

そのゴミの種類は様々でしたが、ほとんどプラスチック製のゴミで、その多くが細かくて先端が尖っていました。砂浜を裸足で歩くととても危険と感じるプラスチックゴミが多く落ちていました。

また、ペットボトルやプラスチックカップ、ストロー等も多く落ちていました。

また、マイクロプラスチックも多くあり、実際に砂浜にこれほど多くのゴミがあることに生徒たちは驚き、海洋ゴミ問題も、他のSDGsゴール同様、一人一人がすぐに対策しなければならない課題という認識を強くもつことができました。

岩瀬浜のゴミの種類



(3) 富山市立岩瀬中学校とのSDGsについてのオンライン交流

3か所のゴミ拾いの結果をもとに、富山市立岩瀬中学校の1学年とSDGs学習についてのオンライン交流を行いました。オンライン交流では、それぞれが学習した内容を発表し合いました。互いの発表内容を聞き、興味をもった内容について質問したり、こちらの知っている情報を伝えたりと充実した交流ができました。

この交流を通してSDGsゴール17「パートナーシップで目標を達成しよう」と関連し、同じ中学生との情報交流を通して、協力して目標を達成しようとする意識が高まりました。

3 今後の取組

SDGsゴール14「海の豊かさを守ろう」の達成に向け、現在、地域を通る国道41号線脇に「ポイ捨て禁止横断幕」の設置を準備しています。長距離トラックの駐車スペースがある場所に多くのゴミが捨てられていることから、その対策として生徒たちが考えました。

この生徒たちの呼びかけが多くの人に影響を与え、一人でも多くの人意識に変化が起ることを期待します。

4 石川県珠洲市のSDGs学習

能登SDGsラボ 高 真由美

能登SDGsラボは、石川県珠洲市がSDGs未来都市として内閣府から選定を受けて、2018年に開設されたSDGsの普及に関わる様々な活動の運営・サポートをする組織です。能登半島の先端、珠洲市にある旧小泊小学校の校舎を利用した「金沢大学能登学舎」が私たちの拠点で里山里海保全や人材育成への取り組みは能登SDGsラボ発足以前の2006年から続いています。

ここでは、能登SDGsラボの活動の一つである、珠洲市教育委員会と連携して行っている珠洲市のSDGs学習についてご紹介します。

SDGs学習教材「みんなの未来のためにできること」

2019年度から2020年度にかけて、SDGs学習を進めるために小学校低学年から理解できる教材を珠洲市教育委員会と連携して作成しました。資料は、SDGsがなぜ作られたのかについて、能登SDGsラボオリジナルの導入資料、オランダの漫画家MARGREET DE HEERさんが作ったSDGsの漫画を翻訳した「地球と17のゴール」、市内全小学校、義務教育学校9校の5・6年生が作成した珠洲市のSDGsで構成しました。



能登SDGsラボオリジナル導入資料



「地球と17のゴール」「すず市SDGs子ども宣言」

この教材は能登SDGsラボのホームページに掲載しています。
<https://noto-sdgs.jp/2020/278/>

珠洲市のSDGs学習

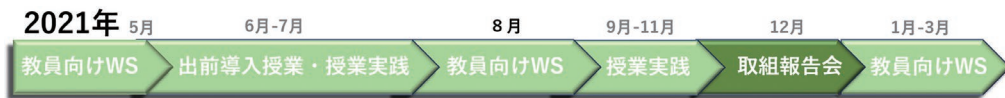
2021年度は、完成したSDGs学習教材「みんなの未来のためにできること」を使ったSDGs学習が珠洲市内全小中学校・義務教育学校でスタートしました。SDGs学習を進めるにあたり、教員向けワークショップの開催（5月、8月、2月）、SDGs導入出前授業、ゲストティーチャーの紹介、SDGs学習取組報告会開催、などを珠洲市教育委員会と連携して行っています。



- ◇講義・演習
 - ①SDGsについて
 - ②世界農業遺産とSDGs
 - ③2020年度アンケート結果から
- ◇ワークショップ
 - 「探究学習を深めるためのヒント」
 - ＜グループワークテーマ＞
 - ①住み続けられるまちづくりを
 - ②GIAHSの視点でSDGsを達成
 - ③海の豊かさを守ろう
 - ④働きがいも経済成長も

教員同士の情報共有の場として
チャットルームの活用を開始

教員向けワークショップの様子



令和3年SDGs学習取組報告会 オンライン配信

12月11日(土)13:45~16:00



プログラム	
13:45	開会挨拶 珠洲市教育長 吉木 充弘
13:50	小学校・義務教育学校前期5・6年生
	1. 上戸小学校
	2. 飯田小学校 5年生
	3. 飯田小学校 6年生
	4. 鹿小学校 5年生
	5. 鹿小学校 6年生
	6. 香山小学校
	7. 正院小学校
	8. 蛸島小学校
	9. みさき小学校
	10. 宝立小中学校 5・6年生
	11. 大谷小中学校 5・6年生
	休 憩
	中学校・義務教育学校後期
	12. 緑丘中学校 1年生
	13. 緑丘中学校 2年生
	14. 緑丘中学校 3年生
	15. 三崎中学校 3年生
	16. 宝立小中学校 7・8年生
	17. 大谷小中学校 7・8年生
15:50	講師 国造大学 サステイナビリティ高等研究所 いしかわ・かなざわオペレーティングユニット 事務局長 永井 三枝子 氏
16:00	閉会

報告会動画は
能登SDGsラボ
HPに掲載中



SDGs学習取組報告会の様子

令和3年度SDGs学習取組報告会の動画は能登SDGsラボのホームページに掲載しています。ぜひ、ご覧ください。 <https://noto-sdgs.jp/2021/672/>

珠洲市のSDGs学習のより詳しい取り組みは、北陸ESD推進コンソーシアムのYouTubeチャンネルに掲載している動画をご覧ください。

前編 <https://www.youtube.com/watch?v=mldLxMtd3BQ&t=31s>

後編 <https://www.youtube.com/watch?v=5wjLDd-DKMo>

5 金沢大学附属病院内学級におけるオンライン天体観望の支援

金沢市キゴ山ふれあい研修センター 主査 刀 祢 雄 大

1. はじめに

今年度、金沢市キゴ山ふれあい研修センターと金沢市立小立野小学校金沢大学附属病院内学級が連携し、金沢星の会、北陸ESDコンソーシアムのご協力を得てオンライン天体観望を実施しました。

金沢市キゴ山ふれあい研修センターは、金沢市の東部にある標高546メートルのキゴ山の中腹にあり、金沢駅からは約10kmという距離に位置しています。施設はこども交流棟と天文学習棟からなっており、こども交流棟は主に小学校や少年団体が宿泊できるようになっています。天文学習棟は、宇宙に関する展示をはじめ、プラネタリウムや大型望遠鏡が設置された天体ドームがあり、市民が宇宙に触れることができます。当センターでは、様々な主催事業を行っていますが、そのひとつに、5～10月の毎週金曜日に「金曜日は星見の日」として、市民の皆様にはプラネタリウムでの星空案内や天体観望の場を提供しています。今回は、その一環として、オンラインで天体観望の場を提供しました。

院内学級は長期の入院を必要とし、感染症の対応も必要なことから、病室や病棟から外へでることができない子供たちがほとんどです。そのため、野外の教育活動が難しく、天体観望をはじめとした自然観察ができません。そこで、私たちは、SDGsの根本でもある「だれひとり取り残さない」をテーマに、学習支援を行うことを考えました。

2. 天体観望の実際

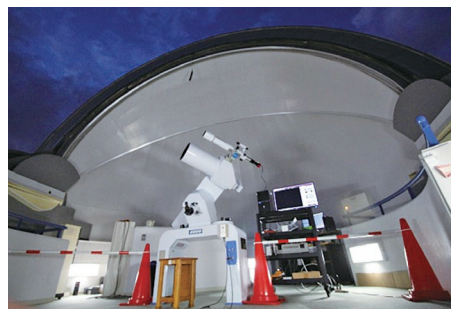
ここ数年、コロナ禍のなかで、様々なことがオンラインで行えるようになってきました。そこで、天体ドームと院内学級をオンラインでつなぎ、児童らには実際には難しい天体観望を行うことができないかと考えました。オンライン天体観望の仕組みは、天体望遠鏡で月や惑星などをとらえ、レンズの代わりにCMOSカメラといわれる専用のカメラで撮影し、それをケーブルでつないだPCモニターに映し出します。あとは、Zoomで共有します。この仕組みを利用することで、ライブで月や惑星などを見てもらうことが可能になりました。実際には、金星が欠けている様子や木星の縞模様、土星の環、月のクレーターなどを見てもらうことができました。他にも、パワーポイントで月や惑星の話をしたり、クイズをしたりしながら進めたことで、児童は意欲的に参加していました。また、金沢星



キゴ山ふれあい研修センター



「金曜日は星見の日」の様子



天体ドーム内

の会の山川さんが、実際に撮影した流れ星の動画も見てもらいました。流れ星が流れるたびに、児童や保護者から歓声があがりました。今年度は計7回のオンライン天体観望を行うことができました。天体観望は天候に左右されるので、すべてが計画どおり行えるわけではないですが、先に述べたように、さまざまな試みを試せることができたことが今後につながると感じています。

児童・保護者の方からはたくさんのご意見をいただきました。「入院中に天体観測や星の学習ができると思っていなかったのに、貴重な体験ができてよかった」、「1年以上学校に通えていない娘が、他の友達と一緒に楽しく勉強させていただく姿を見て、とてもうれしかった」というように、友達と学習するということができない児童に、このよ



院内学級の様子

うな場を提供できたことがとてもうれしく感じました。一方では「ハウリングで頭が痛くなった」、「画像が鮮明だとよい」などというご意見もあり、設備を更新してより満足していただけるものを提供していけるようにしていく必要があると感じました。今回、実施した観望以外に、美術館や博物館に見学に行きたいという希望もいただき、私たちが思っている以上に、児童らは様々なことに興味を持っていることが分かりました。

3. 成果と課題

今回の事業の成果は3つあります。1つ目は、主催事業である「星見の日」に実施することで、職員に過大な負担なく行えました。これは、今後も継続していくためにはとても大切なことです。2つ目は、キゴ山ふれあい研修センターと金沢星の会、北陸ESD推進コンソーシアムの連携で実現できたことです。これは、ゴール17にもあるように、持続可能なためのパートナーシップの締結につながります。3つ目は、教育においてこのDXの手法を、他の分野、施設に汎用できる可能性が高いことです。これは、院内学級の他に、提供を必要とするところにオンライン観望を広げることに繋がります。

課題は、PCなどの電子観望設備が老朽化していることです。具体的には、インターネット環境の整備、アプリの補強、PCの更新、Zoom等のオンライン環境の安定化などです。

4. 今後

今後の展望は、課題であるインターネット環境の整備、PCの更新などが進めば、院内学級以外でもオンライン天体観望が行うことができます。誰ひとり取り残さないという点では、児童相談所、特別支援学校、不登校の子供たち、養護施設、介護施設など、実際にキゴ山まで足を運べない人たちに天体観望の場を提供できます。また、小中学校が進めているGIGAスクールにおいても、理科の授業での教材の提供なども可能でしょう。ゆくゆくは、「金曜日は星見の日」をオンラインで一般市民に開放できることもできると考えています。

社会見学、自然観察なども同様に「学びの場」として学習支援として行えるのではないかと考えます。そのためには、企業や専門家による技術的支援、アバターになってくれるボランティアの存在など、これから計画的に進めていかなければいけません。ぜひ挑戦してみたいと考えます。

6 能美市の産学官協働プロジェクト

「こどもサミットSDGsを考えよう！」 in 能美

金沢星稜大学 新 広 昭

新学習指導要領では「SDGsの担い手の育成」を教育の目的とすることが明記され、ESDはその目的に向けた教育であるという位置づけが明確になりました。そのためには、こどもたちが持続可能な地域社会の理想像（目標）を持ち、様々な人たちと繋がり、地域の資源を活かしながら地域課題（ハードル）をクリアしていく発想力や構想力を身につけていくことが大切です。

「こどもサミットSDGsを考えよう！」（以下、サミット）のワークショップは、能美市の小学生にこういった力を養ってもらうことを目的として、同市に立地する株式会社日本海開発の代表取締役社長である南 純代さんが中心となって小学校に働きかけ、金沢星稜大学の新ゼミナール、井上ゼミナール、北陸ESD推進コンソーシアムも連携して2020年度から行っています。

2020年度は辰口地区3校のみで実施しましたが、2021年度は市全域（寺井地区3校、辰口地区3校、根上地区2校）で地区ごとにZoomを使って学校間を繋いで実施しました。2021年度の参加生徒数は490人に上ります。

サミット開催の経緯ですが、日本海開発では社会貢献活動（CSR）の一環として、市内の小学生に総合の学習の中で「こうなったらいいな・2030年の能美」という環境食育絵日記を描いてもらい、展示会を開催するという取り組みを行っています。これをSDGsサミットに発展させられないかという相談を南さんから受けたので、金沢工業大学SDGs Global Youth Innovators が考案したSDGsカードゲームX（クロス）を参考にした能美市オリジナルのカードゲームを作成し、サミットで実施することを提案しました。

このゲームは、17項目あるSDGsのうち、ある特定の項目だけを達成しようとする多くの場合、他の項目の達成の阻害要因となるというトレードオフが生じることに着目し、その解消に向け資源（リソース）を活用したアイデアを出し合い、繋ぎ合わせていくことでイノベティブな解決策を見出していくという、発想力・構想力をトレーニングするゲームです。

ゲームにはアイデア出しの“お題”となるトレードオフカードと解決の“アイテム”となるリソースカードが必要です。そこで、小学生が描いた絵日記を元に金沢星稜大学の学生がカードを作成し、サミットにも参加しました。

- ・トレードオフカード例：農薬を使わずに作物を作るため、除草剤を使わず自分たちで雑草を刈ると、農薬の成分が検出されないお米をつくることができたが手間暇がかかって値段が上がりお米を買えない人が増えてしまった。
- ・リソースカード例：九谷焼、手取川、国造ゆず、ロボット、ドローン、微生物

また、校長先生や教員の方にSDGs・ESDとカードゲームとの関係を理解していただくために、北陸ESD推進コンソーシアムの今井コーディネーターと私（新）とで各小学校に説明にうかがいました。

サミット当日は、各小学校のクラスごとに数名ずつのグループに分かれ、選んだトレードオフカード（お題）に対してリソースカードを使った解決策をディスカッションし、その解決策をクラスごとにZoomで発表・共有し感想を話し合うという流れで行いました。

サミットの時の子どもの様子について、日本海開発のホームページにアップされている南さんの報告記事を紹介したいと思います。

2学期から市内8校の小学6年生とSDGsの勉強をしてきました。初めは「SDGs？聞いたことはあるけど何するの？」、「持続可能な社会って？」とこんな様子の子どもたちでしたが、「こうなったらいいな・2030年の能美」の絵日記を描いてもらい、それを元に作った地域課題（トレードオフ）を地域資源（リソース）を使って解決していくというワークショップを行いました。お互い同じ中学校へ通う校区内交流ということもあり、学校紹介を工夫したり、ワークショップ後の発表では「なるほど、こんな考え方もあるんだ！」と思わせる発想があり、同じ課題でも違うリソースを使うと色々な解決法が出てきて、どれも「笑顔あふれる街づくり」を描いていました。授業をするうちに感じたことは、みなこの地域や仲間が好き！それぞれに友達や家族のことを考えているからこそ、色々な発想が出てきてワクワクする地域を描けるんだなということです。こどもたちの「ワッ！」という活気が渦巻く光景に多くの感銘を受けました。特に、子どもたちが元気よく話し合いをしている姿に、負けずにSDGsを推進する意欲をいただきました。感想発表では、たくさん手が上がり、どの生徒もSDGsが共通言語となっていました。「自分たちが行動を起こすことで変わっていくこと」、「そのために今できる事は何か」そんな言葉が出てきて、頼もしい姿を見ることができ嬉しく思いました。



ワークショップの様子（2021年度）



Zoom集合画面(2020年度)

このサミットは地元企業と学校との地域連携活動をベースに、大学、教育委員会、市役所、北陸ESD推進コンソーシアムなど多くの主体の”つながりの連鎖”すなわちパートナーシップによって実施されました。このことにより子どもたちは地域社会がいろいろな人たちが関係しあって成り立っていることを意識できたのではないかと思います。その意味で、今回の取り組みはこれからのSDGs・ESDの一つの形（モデル）を示すことができたのではないかと思います。

2021年度北陸ESD推進コンソーシアム成果報告会での講評

(金沢大学 加藤 隆弘 准教授)

このコロナ禍で業務量が増え、且つ教師の働き方改革の流れもあり、新たな取り組みや研修を起こすことが難しい状況下にあっても、北陸地域では状況に対応しつつ、着実に取り組みが進んでいることを実感した。今回実践報告いただいた学校、先生方は今までにある取り組みを改めて見つめ直してよりよくしたいと考え、地域の方々や我々のような外部機関とも連携し、見通しを立てて取り組まれていた。より多くの子どもたちが次第次第に自分事として捉え、自ら進んで学び、行動したくなる…そんな姿を目指して、地域の方、学校の先生方もともに学び取り組まれている様子を明確に示していただいた。地域のホンモノの願い、個性ある専門家との出会い等を通して、知っていたつもりのことを改めて知り直し、魅力に気付きなおいし、世界が広がり、実社会に関わるおもしろさに出会っていく…ESD/SDGsの学びの醍醐味が改めて実感できた。各学校や地域の諸機関、公民館などがそれぞれ繋がり、その魅力を十全に引き出しているのが北陸の取り組みの特色なのだと感じた。

(富山大学 成瀬 喜則 教授)

コロナ禍の中、学習をどう進めたらいいのか、どうしたら子ども一人一人の問題として認識できるか、今日の発表を聞いていると工夫されていると感じた。取り組みの目標とか課題解決の方法も明確化されており、この数年間でアップグレードされている。

3つの観点から発表を聞いた。1つ目は子供一人一人の問題として認識させる、ごみを分析する、ゲストティーチャーを呼び、学習の成果としてまとめるだけではなく、提案していくところまで進めている点である。神通碧小学校、楡原中学校、鳴鹿小学校で見られた。2つ目は新たな教育方法の観点、多くのESDは総合的な学習の時間で行われているが、英語の授業や社会科の授業の中で積極的にSDGsを取り入れている点である。パネルディスカッションという新たな工夫もなされており、今後期待できる。最後は学校、教員をどうサポートしていくかという点である。教員研修として先生方に必要感を育成させるという新神田小学校の取組、教材を提供するという国連大学OUIKや能登SDGsラボの取組、地域との連携を進める大学生グループの取組があった。学校、教員をサポートすることも今後必要だと感じた。いろんな考え方を使って子どもの学びを育成できればいいと感じた。

(福井大学 大山 利夫 教授)

すばらしい実践ばかりで、長時間であったが全ての報告を集中して拝聴することができた。学校以外では、能登SDGsラボの教員を支援する取組は進んでいると思った。福井でもこのような施設・組織があれば、各学校でのSDGsの取組がさらに広がると思う。ビデオの中の先生のインタビューから、珠洲市の子供たちが教科の中での学びを自然とSDGsとつなげている、そういう思考になっている、SDGsが子供に根付いていると印象をうけた。金沢の学生さんの「味噌蔵SDGs」は、学校だけでなく一般の方、いろいろな年齢層の方にSDGsを広げるというすばらしい活動だと思う、いろいろな人とつながっていくことがSDGsの実現のために大切だということを改めて認識した。キョウ山ふれあい研修センターの「オンライン天体観望」の報告も興味深く聴かせていただいた。博物館など天体観測設備がある施設とコラボすれば、家庭に居ながら天体について学ぶ機会が得られるようになると思う。楡原中学校をはじめとする学校での実践はどれも良く工夫されており、子どもたちが問題意識を共有しながら解決策を考え、周りの人たちも巻き込みながら実行に移していくようすがよく見えたと思う。やはり多くの人と繋がっていくことが子どもたちの学びのためにも大切だと思った。

(文部科学省 堀尾 多香 氏)

地域との取り組み、連携がうまくいっていることが多い。学校の先生方が地域の課題を、国際的な課題をいかに自分事にするかといった時に地域の身近な課題とを結びつけることでより子供たちが地域の一員として自覚を持つ、それに対して周りがサポートする仕組みができてきている。非常に重要で地域の課題を取り組むときに学校だけでは難しいし、今回専門家のゲストティーチャーを招いたり、研修を行ったりすることは学校だけでは難しく、現場を見るとか、その分野の専門家の人、実際のデータを見る、上手く組み合わされていて、先生方が生徒の願い関心を上手く引き出しながら地域の課題を解決する方向に授業をたてているなと感じた。どんどん発展させていって、全国の学校で取り組んでいかないといけない。ESDをどう取り組んで行ったらいいかわからないといったところに、コンソーシアムの先生方にはいい取り組みをしている事例を活動に困っている学校に紹介頂いて、何も新しいことをする必要はなくて、持っている資源やネットワークを使うことで十分取り組んでいけるというメッセージを発信して頂きたい。我々文科省としてもきちんと発信できるよう、何も新しい取り組みをしなきゃいけないというわけではなく、身近な課題、地域の課題を取り組み、今ある資源、ネットワーク、リソースを使うことで対応できるといった事例を紹介することでお互い学び合っていく仕組みを作っていく努力をしていきたいと思う。

第2章 なぜSDGs・ESDが必要なのか？

本章では、SDGs・ESDの必要性やその関連性について説明します。
また、地域でのユネスコ活動によるESDの取組事例を紹介します。

1 SDGsに取り組む必要性

(1) SDGsとは

はじめにSDGsについて確認しておきましょう。SDGsとは、「持続可能な開発目標」のことです。2015（平成）年、国連において「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ（行動のための計画）」が採択されました。この計画の中で各分野での目標を具体的に示しているのが、SDGs（持続可能な開発目標）です。2030年のあるべき姿を想定し、そのために必要な目標が定められたのです。

Sustainable	サステイナブル	持続可能な
Development	ディベロプメント	開発
Goals	ゴールズ	目標

「だれ一人取り残さない」持続可能で多様性と包括性のある社会の実現のため、2030年を年限とする国際目標なのです。政府や企業等の組織体だけでなく、日常生活の中でわたしたち一人一人が取り組むことが大切になります。

(2) SDGsの目標

SDGsには、17のゴールと169のターゲット（下図参照）があります。17のゴールは、社会分野（1・2・3・4・5）、経済分野（8・9・10・11・12）、環境分野（6・7・13・14・15）、横断分野（16・17）に分類すると分かりやすいでしょう。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



2 SDGsとESDとの関係

(1) ESDの意義

Education for Sustainable Development

ESD（持続可能な開発のための教育）は、2002年に我が国が初めて提唱し、ユネスコを主導機関として国際的に推進してきました。

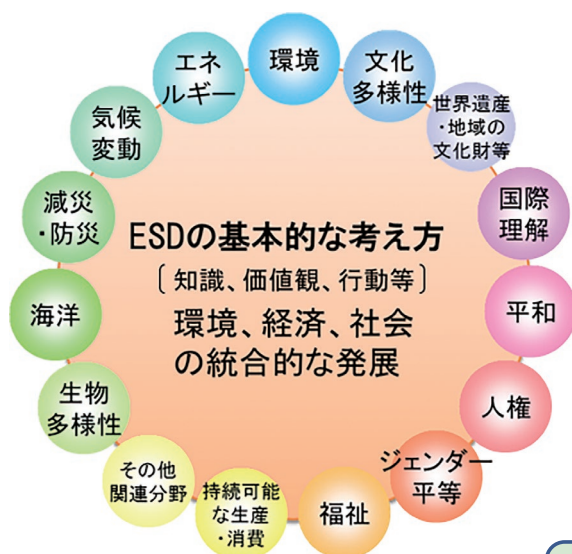
ESDとは、人類が将来の世代にわたり恵み豊かな世界を確保できるよう、気候変動、生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大等、人類の開発活動に起因する現代社会における様々な問題を、各人が自らの問題として主体的に捉え、身近なところから取り組むことで、それらの問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらし、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動のことです。

2019年の国連総会決議においては、ESDがこのSDGs全てのゴールを達成するための鍵であると述べられています。学校教育に留まらず、あらゆる場面での教育活動を通じて習得された知識、技能、価値観を行動変容に活かすことにより、持続可能な社会を実現が可能になります。

(2) SDGsの目標4

教育はSDGsの目標4に位置付けられています。ESDは目標4の中のターゲット4.7に記載されています。

2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力文化の推進、グローバルシチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献理解の教育を通じて、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。



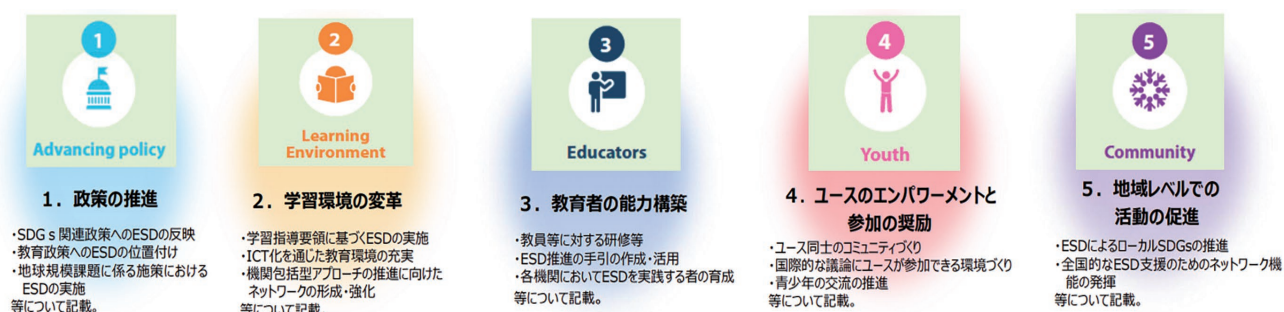
ESDはSDGs全ての目標実現の鍵

(3) ESD for 2030

ESD for 2030という新たな国際枠組みが2019年の国連総会において採択されました。2021年5月、ユネスコとドイツ政府の主催により「持続可能な開発のための教育 (ESD) に関するユネスコ世界会議」がオンラインで開催されました。同会議をキックオフとしてESD for 2030が本格始動しました。

我が国では、「ユネスコ未来共創プラットフォーム」や「ESD推進ネットワーク」を活用し、自治体、NGO、企業、研究・教育機関等をつなぐ重層的なネットワークを強化すること、国内のみならず国際的にも情報発信を強化し、連携を図るよう努めています。ESDを実践するために、多様なステークホルダーを巻き込むことに重点を置く必要性があります。

下図のように、ステークホルダーごとの具体的な取組を5つの優先行動分野で記載されています。



もはや、ESDは学校教育だけが行えばよいというものではなく、社会全体で取り組むことが求められています。

(4) ユネスコ活動

ユネスコ (UNESCO: 国際連合教育科学文化機関) は国連における唯一の教育に関する専門機関です。

我が国のユネスコ活動は、1951年に我が国がユネスコに加盟する以前から、民間の自発的な協力活動として始まりました。世界初となるユネスコ協会が仙台で誕生した後、民間のユネスコ活動は瞬く間に全国に広がりました。

複雑化する国際社会の中においても、国内外のユネスコ活動が人類の心に「平和の砦」を築くというユネスコ本来の趣旨・目的を踏まえて積極的に役割を果たしています。

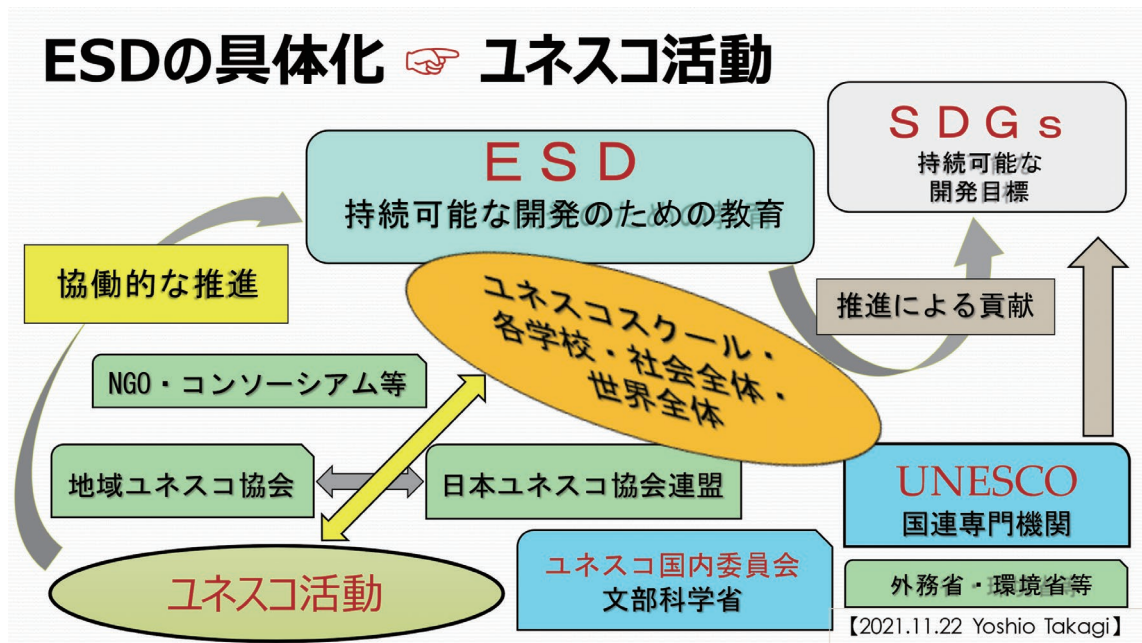
ユネスコは、SDGsの達成を目指し、教育、科学、文化、コミュニケーション等各分野の事業を実施しています。AIの倫理やガバナンスといった未来の在り方を見据えた事業にも取り組んでいます。

我が国では日本ユネスコ国内委員会や関係省庁が協力しSDGs達成に貢献するESDを推進しています。また、地域におけるユネスコ活動としては、世界寺子屋運動など開発途上国支援のための活動だけではなく、地域の実情に応じた国際協力活動や自然・文化保護活動など、多様な活動が行われています。

3 地域のユネスコ活動によるESDの取組事例

(1) ESDの具体化

富山ユネスコ協会の「ESD/SDGs部会」では、ESDの具体化を図るため、「ユネスコ活動」を下図のように位置づけています。様々な関係諸団体との連携、協力体制を構築しながらユネスコスクールを中心に学校でのESDを支援しています。



(2) 平和・SDGsをテーマとした学習支援

富山市立奥田北小学校第6学年児童を対象に本会会員が講師となり、ユネスコ学習（6月～7月）を行いました。

実際の学習の流れは次のとおりです。

- ① 講師は学習を始める前に2回、2名の担任教諭と学習内容を打合せた。
(オンライン)
- ② 講師は児童に「平和」「SDGs」をテーマとしてプレゼンを行った。
(訪問) 2回実施した。
- ③ 児童は講師のプレゼン後、それぞれに学習した成果を発表する発表会を行った。
発表会には、公益社団法人日本ユネスコ協会職員もオンラインで参加し、講評を行った。
- ④ 児童と担任教諭は成果報告会での発表をまとめ、10分間の動画を作成した。
- ⑤ 富山ユネスコ協会主催の「平和の鐘を鳴らそう運動」のメイン会場で、参加者は富山市立奥田北小学校第6学年児童による動画を視聴した。

2021(令和3)年度 ユネスコ学習 in 富山市立奥田北小学校

第1回 『平和とユネスコ』 について

〈富山市立奥田北小学校第6学年ユネスコ学習資料〉

今日の学習

- ① コインでつなぐ『平和の鐘』
- ② ユネスコとは何？(目的は)



児童・学校(教員)・ユネスコ協会は、ユネスコ学習を通じて互いにどのような学びがあったのでしょうか。下表にまとめてみました。

児童	<ul style="list-style-type: none">・ユネスコそのものについてはじめて学ぶ機会となった。・平和の鐘に尽力した日本人の生き方について学んだ。・学校生活の中での自分たちの活動をふりかえり、できることに取り組もうとした。
学校・教員	<ul style="list-style-type: none">・ユネスコスクールとして ESD 推進にあたり、「総合的な学習の時間」の中に位置付け、ユネスコ活動として平和・SDGs を学ぶ意義を認識できた。
ユネスコ協会	<ul style="list-style-type: none">・学校の実情、児童の実態を踏まえてユネスコ活動を支援していく大切さを実感できた。また、児童の学ぶ姿を通して共に平和の心を自らに育み行動する大切さを実感できた。

第3章 SDGsと地域社会

この章では、これまでの実践事例を参考に、「学校」が地域社会のSDGs・ESDの学びのプラットホームの一員となることを探りたいと思います。

1 連携・協働の有り様

前章の3節では、地域のユネスコ活動によるESDの取組事例が紹介されていました。富山ユネスコ協会のユネスコ活動によって、児童の興味関心や好奇心が刺激され、課題について探求する意気込みを高め、専門的な理解を深めています。最後の表のように関係した児童・教員(学校)・ユネスコ協会員それぞれがユネスコ・SDGsの学びを得ています。ポイントは、「児童・生徒が主体となる」ことはもちろん、「参加者それぞれも主体となる」ことだと思われます。正解が明確でない時代、学校での教師・子ども関係が、「教える・教わる」関係から「共に学ぶ」関係に変わってきた時代、それぞれの学びが拡張し響き合うのです。

I部の実践事例のいずれの学習も、外部のステークホルダーの方との連携・協働なくしては成り立っていません。富山市立榆原中学校の「身近なSDGs 私たちの関わり～海の豊かさと神通川上流の関係～」の実践では、「上行寺での講話」(富山ユネスコ協会)→「環日本海環境協力センター」訪問→岩瀬浜・神通川上流・学校周辺のゴミ調査→富山市立岩瀬中学校とのオンライン交流→「ポイ捨て禁止横断幕」の設置へと専門家の話・体験・他校との交流・アウトプットの流れです。学習の中に、生徒の興味・関心を中核に身近な課題をステークホルダーの方々の協力の下で探究する構成となっています。

また、能美市の「こどもサミットSDGsを考えよう!」では、地元企業と学校との地域連携活動をベースに大学、教育委員会、市役所、北陸ESD推進コンソーシアムなど多くの主体の“つながりの連鎖”パートナーシップによって活動が実施されています。

2 新時代の学びとしての“学校3.0”

それでは、学校外のステークホルダーとの連携・協働はどう進めていけばよいのでしょうか。『令和の日本型学校教育』の構築を目指して(中教審第228号)では、「子供の学びを教師が把握し、伴走すること」や「協働的な学びの場を確保すること」が掲げられています。また、文部科学省はSociety 5.0に向けた新時代の学びとして“学校3.0”を2018年6月に発表して、個別最適化された学びのまとめ役・「ラーニングオーガナイザー」の必要性を提案しています。

そこでは、学校だけで教師だけが一方的に教えるような教育活動から、多様な選択肢の中で、自分自身の答えを生徒が自ら見いだすことができるような学習が中心となる場へと転換し、生徒一人一人の興味や関心に沿って、学校だけにとどまらず、地域社会、企業、NPO、高等教育機関といった多様な学びの場を活用し、異なる年齢や背景を持つ相手とコミュニケーションしながら「社会に開かれた教育課程」による学びを進めていく必要がある、としています。これまで学校が子どもたちの教育のすべての分野・機能を担ってきましたが、これからは分野や機能ごとに、多様な担い手に委ねる構想が描かれています。

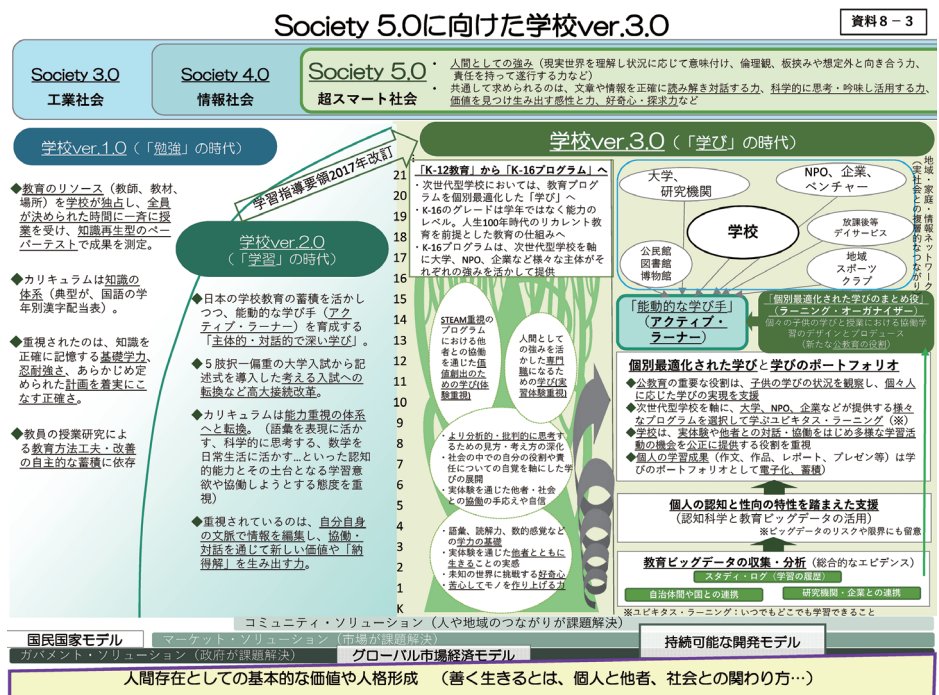
部活動の大部分が学校の枠外に置かれるだけでなく、学習活動についても学校外の場合、社会や民間の力に委ねる姿が叫ばれています。これまで学校教育が一手に引き受けてきたものを領域・機能に分解して社会や民間に委ねるのが適切、という考えです。

3 地域社会でのSDGsの可能性

これまで学校においてもっぱら教職員が担っていたことを、教職員以外の外部人材（よそ者）にも協力して担ってもらおうという「協働体制」は出来るのでしょうか？これまでの教育改革の経験から、国から示される改革が学校現場ですんなりと受け入れられ難いことは明らかです。学校には独特の「学校文化」「教員文化」が存在しており、外からもたらされる変革も、できることなら避けて済ませ、現状を維持しようとする傾向があります。確かに、教職員が外部人材とともに「協働体制」を構築すべきである提案は、避けて通れないことです。スクール・カウンセラーや部活動支援員、特別支援教育支援員など、学校教育に学外者の協力を求める動きは、以前からも少しずつ進行してきました。それでも、そこで展開される活動は、学外の「社会教育」のフィールドでの活動が中心で、学校内では「授業補助」「部活動指導補助」という補助的な助手の位置づけの活動に留まっています。形式的には、学習活動というより補助活動でした。しかし、今回提示されている「協働体制」は、従来から学校が担ってきた学習活動や特別活動という中核に「外部人材」（よそ者）が入って行って役割分担をしたり、協力し合ったりして協働活動をしよう、という提案です。

この協働活動が、実践事例の中にはでき始めていると思われる。確かに外部人材は、まだ「ゲストティーチャー」・「専門家」だったりする学外の人です。それでも、富山ユネスコ協会の取り組み事例のように、その活動を通して「共に学ぶ」人になっています。それは、何よりSDGsという、生態的・社会的な持続可能性の危機が、人類が解決すべき最優先課題であるという共通認識があるためです。さらに、子どもが地域の未来を支えるという共通認識（心情）があるからです。

このような共通認識（心情）を共に持つことが一番大切です。SDGsは、そのためのツール・エンジンとなっています。学校がSDGsを通して地域社会をつないでいく一員になり始めています。



【Society 5.0に向けた人材育成 ～社会が変わる、学びが変わる～
(平成30年6月)・文科省】

参考資料

- 日本ユネスコ国内委員会（文科省）「ユネスコ活動の活性化について（建議）」ウェブサイト
<https://www.mext.go.jp/unesco/002/1422209.htm><https://www.mext.go.jp/unesco/>
- 「持続可能な開発のための教育（ESD）推進の手引」（令和3年5月）ウェブサイト
https://www.mext.go.jp/content/20210528-mxt_koktougou01-000015385_3.pdf
- ESD 持続可能な開発のための教育（文科省）ウェブサイト
<http://www.ESD-jpnatcom.mext.go.jp/index.html>
- 今日よりいいアースへの学び 持続可能な開発のための教育（ESD）とユネスコスクール（文科省）ウェブサイト
<http://www.ESD-jpnatcom.mext.go.jp/about/message.html>
- ACCU 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターウェブサイト
<http://www.accu.or.jp/jp/accudESD/>
- ユニセフ「SDGs CLUB」
<https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs>
- JICA 地球のひろば
<https://www.jica.go.jp/hiroba/teacher/material/sdgs.html>
- 我が国における「持続可能な開発のための教育（ESD）」に関する実施計画（第2期ESD国内実施計画）ウェブサイト
https://www.mext.go.jp/unesco/001/2018/1407955_00010.htm
- 国立教育政策研究所ウェブサイト <http://www.nier.go.jp>
- 日本ユネスコ協会連盟ウェブサイト <http://www.unesco.or.jp/>
- 国連広報センター「2030アジェンダ」ウェブサイト
https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/
- ユネスコスクール公式ウェブサイト <http://www.unesco-school.mext.go.jp/>
- 認定NPO法人「持続可能な開発のための教育推進会議（ESD-J）」ウェブサイト
<https://esd.w3.kanazawa-u.ac.jp/>
- SDGs.TVウェブサイト <https://sdgs.tv/>
- 文科省「教員養成部会（第100回）配付資料『Society 5.0に向けた学校ver.3.0.』」ウェブサイト
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryu/_icsFiles/afieldfile/2018/06/20/1406021_17.pdf
- 北陸ESD推進コンソーシアムウェブサイト <http://www.hokuriku-ESD.org/>
北陸ESD推進コンソーシアム「eランニング教材」（YouTubeチャンネル「北陸ESD」）ウェブサイト
<https://www.youtube.com/channel/UCchuryTY67iAg10y-Bp1XB8A>
- 北陸ESD推進コンソーシアム「北陸版SDGs・ESD実践ガイドブック（2019年度版）」ウェブサイト
<https://www.uconi.jp/newsite/jigyoku/ESD/index.html>
- 「教員のためのESDガイドブック」北陸ESD推進コンソーシアム（2017年）発刊
- 内閣府「第5期科学技術基本計画『Society 5.0』」ウェブサイト
https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/society5_0.pdf
- 内閣府 教育・人材育成ワーキンググループ『教育・人材育成政策パッケージ策定に向けた中間まとめ』ウェブサイト
<https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/kyouiku/jinzai/chukan.pdf>

第2章 執筆者 高木要志男（富山ユネスコ協会 会長）

第3章 執筆者 今井 和愛（北陸ESD推進コンソーシアム コーディネーター）



本ガイドブックは、独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて製作したものです。



SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS

2022年3月発行
石川県ユネスコ協会
北陸ESD推進コンソーシアム